

東大 IR3S「地球温暖化懐疑論批判」発行の経緯と経歴詐称の意味

HP 管理者 近藤邦明

1. 発行までの経緯

1999年に環境経済・政策学会の和文年報第4集において、槌田敦は当時脚光を浴び始めていた人為的に大気中に排出された付加的なCO₂の温室効果による地球温暖化の脅威を扇動する『CO₂地球温暖化脅威説』の非科学性を指摘する論文「CO₂温暖化脅威説は世紀の暴論」を發表しました。

私は、2000年にHP「『環境問題』を考える」を開設し、2003年に人為的CO₂地球温暖化脅威説の非合理性を指摘する「二酸化炭素地球温暖化脅威説批判」を公開しました。

2005年6月、後に「地球温暖化懐疑論批判」の共著者に名前を連ねることになる河宮未知生（海洋研究開発機構/JAMSTEC）は、気象学会誌「天気」の『質疑応答』において、C.D.Keelingによる気温変動と長期傾向を除いた大気中CO₂濃度変動の関係を示すグラフに対して、何の合理的な証拠も示さないまま人為的なCO₂排出による温暖化とは無関係な自然現象であると論評しました。

この河宮の説明に対して疑問を持った私は、大気中のCO₂濃度の変化と気温変化の關係に着目して、CO₂濃度に関しても長期傾向を取り除かずに両者を比べることにしました。両者の年増分を比較することによって、気温変動が先に起こり1年程度の遅れで大気中のCO₂濃度が増加することが明らかになりました。つまり、CO₂地球温暖化仮説は否定されたのです。

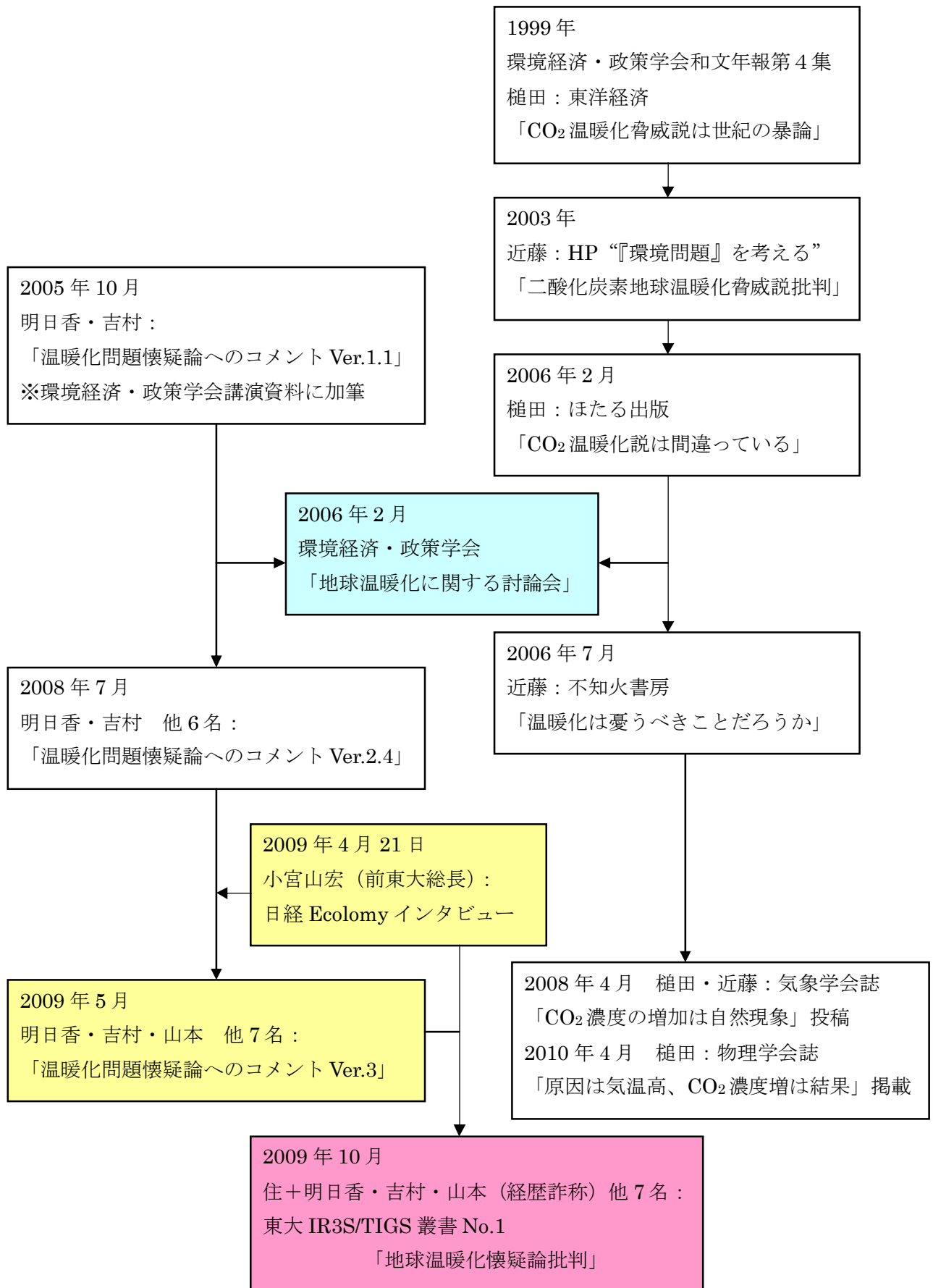
2005年10月の環境経済・政策学会において、人為的CO₂地球温暖化説を支持する立場をとる東北大学の明日香壽川と、これに反対する槌田との間で議論が交わされましたが、結論は得られず、2006年2月に改めて環境経済・政策学会主催の『地球温暖化に関する討論会』が開催されました。

明日香は吉村純（気象庁気象研究所）と共に、2005年10月の環境経済・政策学会の講演資料を基に、私的なレポートである「温暖化問題懐疑論へのコメント Ver.1.1」をネット上に公開しました。

槌田は、私の得た大気中CO₂濃度と気温偏差の年増分の關係を含めて、人為的CO₂地球温暖化説の誤りを指摘する「CO₂温暖化説は間違っている」（2006年2月ほたる出版）を發行しました。その後私は「温暖化は憂うべきことだろうか」（2006年7月不知火書房）を發行しました。

2006年2月の環境経済・政策学会の討論会においても結論は得られず、論争は気象学会と物理学会の場に舞台を移すこととなります。

東京大学 IR3S「地球温暖化懐疑論批判」発行の経緯



槌田はその後、気象学会の会員となり、物理学会と気象学会の双方の年次講演会において大気中 CO₂ 濃度の変化は気温変動の結果であるという報告を行うと同時に、両学会の機関誌に論文を投稿しました。

物理学会誌では、2007年2月に論文「CO₂を削減すれば温暖化は防げるのか」(Vol.62, No.2, 2007)が掲載されました。

更に、気温偏差と大気中 CO₂ 濃度の年増分の比較検討の結果から、槌田は気温と大気中 CO₂ 濃度の時間変化率が直接対応するのではないかと推測し、私はこの着想に沿って分析を行い、それを観測データで確認しました。

この結論をまとめて2008年4月に槌田・近藤の共同論文として気象学会誌に論文「CO₂濃度の増加は自然現象」を投稿しました。この論文は査読意見に従って数回にわたって修正を行いましたが、気象学会はこの論文について合理的な理由を示せないまま掲載拒否することを決定しました。

槌田は物理学会誌に対してこの気象学会への投稿論文と同じ要旨の紹介論文を投稿し、こちらは少し時間がかかったものの、2010年4月号に論文「原因は気温高、CO₂濃度増は結果」が掲載されることとなります。

一方、「温暖化問題懐疑論へのコメント」はその後、明日香壽川といくつかの独立行政法人である研究機関に所属する若手の研究者で構成される私的グループによる数回の改訂を経て、2008年7月に「温暖化問題懐疑論へのコメント Ver.2.4」によって、ほぼ最終的なものになりました。この段階における執筆者は以下の8名とされています。

東北大学 明日香壽川
気象研究所 吉村純
海洋研究開発機構 増田耕一
海洋研究開発機構 河宮未知生
国立環境研究所 江守正多
国立環境研究所 野沢徹
国立環境研究所 高橋潔
海洋研究開発機構 伊勢武史

この Ver.2.4 までは、あくまでも明日香グループの私的なレポートにすぎませんでした。内容的には非論理的で杜撰な理論構成に基づく稚拙な内容であり、それ故それほど大きな影響力も無いもので、取り立てて問題にするようなものではありませんでした。

さて、人為的 CO₂ 地球温暖化仮説を支持し、原子力業界ともつながりの深い前東京大学総長である小宮山宏（現在三菱総研理事長）は、東大総長在任中に、同大学のサステイナビリティ学連携研究機構（IR3S）の地球持続戦略研究イニシアティブ（TIGS）の統括ディレクターである住明正に、人為的 CO₂ 温暖化論争に終止符を打つための冊子の出版を指

示しました（日経 Ecolomy2009年4月19日）。

この小宮山の思惑を手っ取り早く実現するために、それまで IR3S とは何のかかわりも無かった明日香の私的グループによる「温暖化問題懐疑論へのコメント Ver.2.4」に多少加筆することによって、「地球温暖化懐疑論批判」の直接的な元原稿となる「温暖化問題懐疑論へのコメント Ver.3」（2009年5月21日）がまとめられたものと考えられます。Ver.3の執筆者は以下の10名になりました。

東北大学 明日香壽川
気象研究所 吉村純
海洋研究開発機構 増田耕一
海洋研究開発機構 河宮未知生
国立環境研究所 江守正多
国立環境研究所 野沢徹
国立環境研究所 高橋潔
海洋研究開発機構 伊勢武史
国立極地研究所 川村賢二
東京大学 山本政一郎

この Ver.3 に住明正の巻頭言などを加えることによって、明日香グループの私的なレポートが、東京大学 IR3S/TIGS 叢書 No.1 「地球温暖化懐疑論批判」として刊行されることになったのです。

2. 東大 IR3S「地球温暖化懐疑論批判」の目的

既に触れたように、もともと明日香グループによる「温暖化問題懐疑論へのコメント」という私的なレポートは、2005年10月の環境経済・政策学会における榎田との人為的 CO₂ 温暖化仮説をめぐる論争をきっかけにまとめられたものです。

その後、何度かの改定を経て、2008年7月に「温暖化問題懐疑論へのコメント Ver.2.4」としてほとんど内容は固まったものと考えられます。しかし、残念ながらその内容はきわめて論理的に雑なもので、気象現象を対象とした自然科学のレポートとしてはきわめて低レベルなものでした。おそらくそのままであればいずれ消え去る運命にあったと思われま

一方、前東大総長であった小宮山宏は、人為的 CO₂ 地球温暖化仮説の強力な支持者であり、彼らが「懐疑論」と呼ぶ人為的 CO₂ 地球温暖化仮説に対して異議を申し立てる研究者の存在を快く思っていないでした。

温暖化問題を含めて、気候変動という自然科学の問題は地表～大気系の中で起こる広範な現象の総体というきわめて複雑な問題であり、その研究はいまだ揺籃期というべき段階

にとどまっていることはまともな研究者であれば誰でも認めるところです。

しかし、その後の小宮山の行動（東大総長を辞職後に三菱総研理事長に就任し、政府戦略会議のメンバーに参画）でわかるように、現在社会の社会的・政治的な要請によって、自然科学の問題である人為的 CO₂ 地球温暖化懐疑論を抹殺することを目論んだのです。

2009年4月19日付けのネット上の『日経 Ecolomy』のインタビュー記事『「知の構造化」で温暖化懐疑論に終止符を』において小宮山は、

「言おうと思えば何でも言えるんです。まるでゲリラ戦ですよ。でも、こういった議論はもう打ち止めにしたい。私が代表を務める IR3S という、大学研究機関をネットワークした組織で、懐疑論に反論する本を5月（予定）に出版します。東北大の明日香壽川教授、住明正教授が中心となって、きちんと反論しています。」

と述べています。

小宮山は、東大 IR3S という権威組織による「地球温暖化懐疑論批判」という本によって、自然科学の議論における主張である「温暖化懐疑論」を社会的・政治的に葬り去ることを目的にしていたことを示しています。

3. 「温暖化問題懐疑論へのコメント」から東大 IR3S「地球温暖化懐疑論批判」へ

しかし、まともな自然科学者の中には小宮山の無謀な目論見に積極的に協力する者はいなかったのではないのでしょうか？そこで白羽の矢が立ったのが、無鉄砲な若手研究者の私的グループであった明日香グループによって既に出来上がっていた「温暖化問題懐疑論へのコメント Ver.2.4」のリメイクによるデッチ上げだったのです。

小宮山の指示を受けた IR3S/TIGS 統括ディレクターであった住は、明日香グループの「温暖化問題懐疑論へのコメント Ver.2.4」を元に、これを東大 IR3S の研究成果であるように偽装し、同時に懐疑論者を社会的に貶めるためにいくつかの仕掛けを組み込みました。

Ver.3 では、東大 IR3S からの発行を意識する文章が付け加えられました。まず、「Our mission」として付け加えられた文章によって、この本の目的が懐疑論との科学論争を行うことではなく、懐疑論を社会的に抹殺することが宣言されました。いわく、

「人為起源の二酸化炭素排出を主な原因として地球規模で気候が温暖化するという、いわゆる人為的地球温暖化説の信憑性や地球温暖化による被害を緩和するための対策の重要性に対し、懐疑的あるいは否定的な見解をとる議論が日本国内でも存在している。社会からの信頼にその活動基盤を置く科学者コミュニティは、こうした現状を座視すべきではないと考える。」

彼らは自らを『社会からの信頼にその活動基盤を置く科学者コミュニティ』と位置づけ、懐疑論を主張する者は反社会勢力であると決め付けたのです。

人為的 CO₂ 地球温暖化仮説という気象現象における自然科学的な議論を社会正義の問題にすり替え、これに異議を申し立てる者を反社会的勢力であると貶め、自然科学的にも抹

殺しようと思図したのです。

更に、Ver.3において懐疑論の特徴として次の10項目が書き加えられました。

- ◎ 既存の知見や観測データを誤解あるいは曲解している
- ◎ すでに十分に考慮されている事項を、考慮していないと批判する
- ◎ 多数の事例・根拠に基づいた議論に対して、少数の事例・根拠をもって否定する
- ◎ 定量的評価が進んできている事項に対して、定性的にとどまる言説を持ち出して否定する（定性的要因の指摘自体はよいことではあるものの、その意義づけに無理がある）
- ◎ 不確かさを含めた科学的理解が進んでいるにも関わらず、不確かさを強調する
- ◎ 既存の知見を一方向的に疑いながら、自分の立論の根拠に関しては同様な疑いを向けない
- ◎ 問題となる現象の時間的および空間的なスケールを取り違えている
- ◎ 温暖化対策に関する取り決めの内容などを理解していない
- ◎ 三段論法の間違いなどロジックとして誤謬がある
- ◎ このような議論の多くは、これまでの科学の蓄積を無視しており、しばしば独断的な結論に読者を導いている。

これは、懐疑論者に対する名誉を著しく毀損するまったく根拠の無い中傷です。

更に、Ver.3の執筆者として『東京大学 山本政一郎』の名が加えられました。

こうしてまとめられた「温暖化問題懐疑論へのコメント Ver.3」の冒頭に東大 IR3S/TIGS 統括ディレクターである住が『IR3S/TIGS 叢書の創刊に当たって』という巻頭言を付け加えることによって、東大 IR3S/TIGS 叢書 No.1「地球温暖化懐疑論批判」が完成したのです。

4. 山本政一郎の経歴詐称の意味

東大 IR3S/TIGS 叢書の位置づけは、名誉毀損訴訟の原告側証拠甲 8-2 号証によると『IR3S/TIGS 叢書は、サステイナビリティ学連携研究機構に所属する研究者の研究成果を社会に還元するもの』としています。

東大 IR3S「地球温暖化懐疑論批判」という冊子の内容には、10名の執筆者によるオリジナルの研究成果などどこにもありません。それどころか、サステイナビリティ学連携研究機構（東京大学、京都大学、大阪大学、北海道大学、茨城大学）に所属する研究者は、「温暖化問題懐疑論へのコメント Ver.3」という最終段階で初めて執筆者として名を加えられた東京大学の山本政一郎しか存在しないのです。

ところが、第1回口頭弁論に提出された被告答弁書において、その東京大学に所属する唯一の執筆者であるはずの山本政一郎は、実際には東京大学の職員ではないことが明らかになりました。その後、裁判所に提出された被告準備書面（1）によると、『被告山本が同

書籍を分担して執筆した当時、被告東京大学の大学院生ないし客員共同研究員という身分を有していた』からだと説明されました。

しかしこれは明らかな経歴詐称です。書籍の執筆者の身分とは、あくまでも当該書籍が公に発行された時点の身分を記すべきです。書籍という校正を重ねた印刷物であれば単純な勘違いによって誤ったとは考えられず、明確な意図を持って経歴詐称であることを認識した上で敢えて『東京大学 山本政一郎』と記したことは明らかです（山本政一郎の正式な役職は独立行政法人産業技術総合研究所職員であろうと思われまます。）。

確かに、山本が東大在籍中に東大 IR3S「地球温暖化懐疑論批判」という書籍の分担執筆にかかわっていた可能性は否定できませんが、科学論文を発表したことの無い大学院生が重要な部分を執筆したことは考えられません。

以上を総合すれば、山本の役割は明白です。東大 IR3S「地球温暖化懐疑論批判」という書籍が、実質的には東京大学あるいは IR3S とはまったく関わりの無い明日香の私的グループの成果物であることを隠蔽した上で、東大 IR3S という権威組織の社会的な影響力を付加することによって、人為的 CO₂ 地球温暖化説に対して懐疑的な研究者の名誉を徹底的に貶め、社会的に抹殺するためにこそ『東京大学 山本政一郎』という肩書きが必要だったのです。

5. 結論: 東大 IR3S「地球温暖化懐疑論批判」という冊子の謀略

以上検討してきたように、東大 IR3S「地球温暖化懐疑論批判」という冊子は、IR3S という組織の気象学における『人為的 CO₂ 地球温暖化仮説』の自然科学的な研究成果を社会に還元するものではなく、明日香の私的グループのレポートを流用し、これに東京大学ないし IR3S という社会的な権威の衣をまとわせることによって、小宮山・住等の個人的な思惑である『温暖化懐疑論者』と呼ぶ研究者を社会的に抹殺することを唯一の目的にまとめられたものなのです。

明日香グループの主張は、自然科学的には稚拙な内容ですが、これに対する評価は科学論争の中で結論を得るべきものです。これを利用して東大ないし IR3S の権威を私物化し、人為的 CO₂ 地球温暖化仮説についての自然科学の論争を社会的に葬り去ろうとした小宮山・住等の行動が最大の問題なのです。ある意味で明日香グループや山本は小宮山や住に利用された被害者なのかもしれません。

現在、槌田を原告とする東大 IR3S「地球温暖化懐疑論批判」に対する名誉毀損訴訟が行われていますが、その本質は、東大 IR3S という権威を私的に利用して、小宮山・住等の個人的な思惑で、彼らが温暖化懐疑論者と呼ぶ研究者に対する中傷によって名誉を毀損し、自然科学における論争を社会的・政治的に終結させようとしていることを告発することなのです。

(2010/03/15)